

「がんになったものは仕方がない。悪いところは切って治そう。そう言われて前向きな気持ちになれました」

山口県在住の S さん。告知を受けた日、家に帰る前に思い立ってお付き合いのあったお隣さん宅に立ち寄り、事情を話します。すっかり落ち込んだ S さんを見て、お隣さんの Y さんは熱いお茶を入れ、毅然と言いました。

「がんになったものは仕方がない。悪いところがあったら切って治そう。誰のせいでがんになったわけでもないし、誰が悪いわけでもない。とにかく悪いものは切って治しましょう。」

そう言われてとても前向きな気持ちになり、治療に取り組めたと話す S さん。ただ、手術の前に抗がん剤治療をする時、「髪の毛は抜けますか？」と先生に聞くと、「抜けます」と言われ、その時、初めて涙が出たと言います。

「髪の毛が抜けても、また生えてくるから、とか、すぐ戻るからとよく言われます。でも、それが辛かった。でも Y さんは、抜けるものはしょうがないじゃない、みたいな言い方をする。その言葉に、いつも強いなあ、と思い、その強さが優しさだと感じていました。」

治療中、仕事で忙しい夫に代わって、二人の子どもたちを我が子のように育ててくれた Y さん。自宅の鍵を渡し、手がかかる幼児の世話や食事作り、思春期の子の進学相談から卒業式への参列までお願いしました。

「強くて優しいあなたに会えて良かった。話していると、いつも元気が出ます。」